

びわこの考湖学

日本の河川は、総じて延長が短く勾配が急なため、降雨の流出が早く、増水しやすい傾向があります。また、日本の降雨量は世界平均の2倍近く、しかも降雨は梅雨や台風のシーズンに集中します。つまり、日本の河川は水位の変動が著しく、水運にはあまり適していないようです。

そこで、聞きなれない言葉ですが「河状係数」というものから河川の水運についてみていくことにしましょう。

河状係数とは、河川の流量が最大になるときと最小になるときとの比率を示す数値で、係数が低いほど年間を通しての水量が一定であり、安定していることを示します。

つまり、河川での水運にあたっては、河状係数が低いことが求められることになるのです。

たとえば、ライン川についてみてみると、ドイツのケル

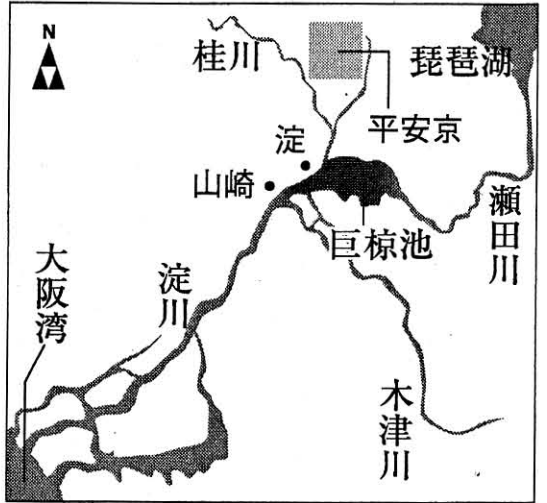
ンでは16、スイスのパーゼルでは18です。イギリスのロンドン郊外テイントンで測定されたテムズ川の係数は8、フランスのパリで測定されたセーヌ川の係数は34、エジプトのカイロで測定されたナイル川の係数は8です。いずれの河も満々と水をたたえ、静かに流れています。

では、日本の河川の河状係数を見てみましょう。

和歌山県橋本の紀ノ川は3740、埼玉県栗橋の利根川は484、新潟県小千谷の信濃川は130、日本でもっとも係数が低いのが大阪府枚方の淀川で10.5なのです。日本の河川がいかに流量の変化が著しいかがわかります。

さらには、先にあげた海外の河川にはほとんど見られませんが、日本の河川には氾濫原としての河川敷があり、船が着岸するのに適していません。これらことから、全般

琵琶湖と淀川水運



中世の淀川

は都や国家の経済に直結する米の取引が行われていた。また、13世紀ごろになると、淀には塩や魚介のみを取り扱う卸売市場ができ、淀川をさかのぼる商船を強制的に着岸させていたようです。

日本でも最も水量が安定している淀川ですが、やはり水位の季節変動が大きかったことから、浅瀬を掘って水路を設ける▽葦を束ねたり、小さな木を積んで堰を作る▽水路に標識を立てる—といった工夫をしていったようです。

的に河川を用いた水運には必ずしもよい条件ではないことがわかります。

とはいえ、「くらわんか船」で有名な淀川は古くから日本の中でもっとも河川交通に適した河川として水運が盛んであり、大きな役割を果たしていました。

このように人や物の往來の多かった淀川には、豊臣秀吉によって撤廃されるまで数多くの関所がありました。15世紀末には河口までの延長約50キロの間に、なんと400カ

所もの関所があったというのです。もちろん、すべての船がすべての関所に立ち寄ったのではなく、積み荷ごとに立ち寄るべき関所が決められていたのだらうと考えられています。

平安京、京都にとって東日本からの物資を受ける港が大津であったのに対し、西日本からの物資を受ける港は日本でもっとも河川交通に適した淀川水系の淀、山崎でした。

そして、淀川の水位が比較的安定しているのは、琵琶湖から瀬田川、宇治川を通じて水量が安定的に供給されているからにほかなりません。

(滋賀県文化財保護協会)

畑中英一

河川交通に適し大きな役割